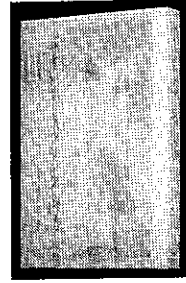


〈書 評〉

サイレントスプリング再訪

マルコ, G. J. ホリングワース, R. M. グーラム, W. 編 波多野博行監訳
旧四六版 293頁 化学同人 1991年



タイトルはサイレントスプリング(カーソン著:沈黙の春)が再び地球を訪れるかのような印象を与えるが、中味は沈黙の春出版以来、25年経過した現在でもカーソンが指摘した人間による情け容赦のない自然への攻撃、環境破壊、それによってもたらされる野性生物の絶滅などが今なお人々にとって重大な関心事であって、それがこの25年間に如何に改善されてきたかを、実証的研究をもとに解きあかそうとした書である。

カーソンは沈黙の春のなかで「海(自然)について真実を語ろうとすれば、詩にならざるを得なかったのです」と美しい文章で自然を讃え、そして自然の破壊の進行を詩で語り、農薬の恐ろしさを誰でもわかる文章で説いてくれた。「・・・春がくると、みどりの野原のかなたに、白い花のかすみ、秋になれば、カシヤカエデやカバが燃えるような紅葉のあやを織りなし、・・・春と秋、渡り鳥が洪水のように、あとからあとへと押し寄せては飛び去る・・・しかし、春がきても自然は黙りこくっている。湖のほとりでは、スゲは枯れ果て、鳥たちは歌わない。」と。しかし、本書ではこれとは対照的に感情に訴えることを避け、端的に、平易な文体で淡々とその後の環境破壊に対する取り組みをつづっていく。すなわち、「カーソンの先見性と遺産、農薬の科学と政策、人間および人間をとりまく環境への健康影響、化学分析の進歩、地球的規模での農薬の使用と課題、農薬・アメリカの化学産業、農薬は過去の問題か、多くの道」と。農薬を始めとする化学物質について、アメリカ化学会の環境改善委員会農薬部会の委員が、政策者、科学者の立場から野性の動物ばかりでなく、人類への影響をめぐる諸問題について書いている。さらに農薬の分類、用途、用語解説、

文献を約30ページにわたって巻末にまとめている。

内容の一部を紹介すると、沈黙の春が出版されて以来、農薬規制が年ごとに厳しさを増し、現在では農薬の使用を許可するかどうかの決定は危険率評価(リスクアセスメント)にかかっている。リスクアセスメントでは、農薬を許可することによりあるいは食品中に残留することによって、人間の発がん危険率が100万人に1人とか、1万人に3人増加するなどと、発がん危険率をまるで数学ゲームのように扱っている。しかし、このような発がん危険率というものがいかに不確実なものか、発がんに関する動物実験のデータから人間の発がん率を推定するときの不確かさ、危険率を評価する上での難点についても議論している。その不確実性の一つの理由として、この25年間に化学分析の感度は10の6乗倍も良くなったのに、毒性の評価方法はそれほど改善されていないことをあげている。危険率評価の重要な過程の一部である毒性評価についての方法や問題点について、このようにやさしく書かれている。

先進国では農業人口の減少、そして発展途上国では人口の爆発的増加の結果、将来、農薬はますます必要となってくる。また、一方では豊かな生活を求め、多種多様な化学物質が大量に生産、消費されている。そこで沈黙の春は必ずしも過去の問題ではなく、将来の問題でもある。それを解決するための多くの道を考察し、将来、化学物質と人間とが共存可能できる選択すべき多くの道があると締めくくっている。化学物質に関心を持つ学生から、リスクアセスメントを研究しようとしている人にまで有益な書と言える。最後に本書の訳者の1人は本院の専門課程の学生であることを付記したい。

藤田 昌彦(衛生薬学部)